

マンガで学ぼう!内間御殿

かなまる しょうえんおう たんじょう うちま うどうん

金丸(尚円王)の誕生と内間御殿

伊是名島で百姓の子として誕生、その才能を越来王子に見いだされ、第二尚氏初代国王「尚円王」になった「金丸」と内間御殿とのかかわりをマンガで見よう。



1415年

金丸(かなまる) 伊是名島に生まれる 童名は思徳金(うみとくがね)



1434年

両親とともに 農業を営んでいたが 金丸20才の時、 両親が亡くなる。 金丸は妻と幼い 弟をつれ、国頭、 久志を経て 1441年27才のとき、 首里に着く。



賑やかな琉球王国の城下町「首里」



金丸は首里で運命的な出会いをする。

申す 名はなんと 金丸です

越来王子 尚巴志の五男 後の尚泰久王



1452年

越来王子に見いだされ 琉球王朝の役人となる。 当初は下役であったが 金丸はただちに頭角を表し 1452年38才の時「黄冠」(当時最高位)まで登りつめた。



その頃、首里城では… 「志魯・布里の乱」勃発



1453年

首里では、第五代国王「尚金福王」が亡くなると、王位をめぐって、王の子・志魯と王の弟・布里が争う。この乱で当時の首里城は焼失し、志魯・布里の双方とも疲弊した。そのため、首里を離れていた「越来王子」が第六代国王「尚泰久」に即位する。



内間御殿



1454年

「尚泰久」が即位するとともに、金丸は西原間切の内間領主に任命され、内間に入った。

西原間切



当時の西原間切

首里王府の直轄地で、東は、津堅島(うるま市)から、現西原町全域。西は、今の那覇市おもろまち、銘苅、首里の石嶺、天久、泊(那覇市)まで及ぶ広大な地域でした。

万国津梁の鐘

尚泰久が作った今に残る王国の気概。琉球王国の交易立国を高らかに宣言し、琉球王国の性格を表現した銘文が刻まれている。

1459年

おものごすくおさすのそば 金丸は御物城御鎖側官に就任(貿易長官)。尚泰久王の右腕として王を支えました。



ごさまる あまわり

護佐丸・阿麻和利の乱

その時、琉球には二人の実力者がいた

琉球王・尚泰久に「護佐丸に謀反の動きあり」と進言し王を騙したのは阿麻和利。最大のライバル護佐丸を退け琉球王座を狙うための策略だったとされている。阿麻和利が王府軍を率いて中城城の護佐丸を滅ぼし、そしていよいよ阿麻和利は王府打倒に取り掛かるが、事前に王府内に情報が伝わっていたため、大敗し勝連城とともに滅ぼされた。

中城城主 護佐丸

勝連城主 阿麻和利

まさか!

謀反です

勝連城の阿麻和利を監視するため、中城城に護佐丸を配置。また、その手前の内間には金丸がにらみを効かせていた。

首里城 勝連城 中城城 内間御殿

阿麻和利が王府軍を率いて中城城を攻めるが、護佐丸は王府軍に歯向かうことはなく自害したと伝えられている。

中城城の戦い

1460年 尚泰久王亡くなる。王の子が「尚徳王」に即位。

1468年 金丸、内間御殿に隠居する

尚泰久王からの信頼が絶大であった金丸も、尚泰久王が死去すると、尚徳王と金丸の関係は尚泰久王の時にはいかず、血気にはやる若き王を金丸が諫めることもしばしばであった。金丸はついに内間村に隠居することになる。

1466年 尚徳王みずから喜界島遠征。

尚徳王は喜界島に自ら遠征に出向くなど、無謀とも思える政策を重ね、次第に重臣の信頼を失っていった。

戦いじゃー

死なな!

「物呉ゆすど我御主、内間御鎖ど我御主」

ものく うちまうざし わがうすう

衣食を与えてくれる者こそ我が主であり、それは内間金丸さまである

安里大親

1470年 尚徳王が死去し、王府の高官はその世子を即位させようと、重臣たちを招集して会議を開いたが、国王としての資質を問われ、泊村の安里大親の神がかりな一言で、金丸を次期王に推すことが決定された。金丸は内間御殿から首里に迎えられ即位し、尚円王となる。

なにごとだ...

金丸様、首里からお迎えに来ました

琉球を豊かにする!

金丸、尚円王となる

金丸は、その豊かな才能と努力で第二尚氏初代国王「尚円王」となる。

尚円王後の時代から現代へ

1666年頃 (詳細年代不明)

尚円王没190年後に摂政となった羽地朝秀の進言により東江御殿(内間御殿)の整備が始まった。



1666年頃に茅葺きの東江御殿建立。
1679年周囲を竹垣で囲う。
1689年東江御殿を瓦葺きに改修。
1706年西原間切の人々によって西江御殿が造られる。



1879(明治12)年

「琉球処分」にて琉球王府が解体され、約300年も続いた琉球王国は無くなり沖縄県となる。



1945(昭和20)年 沖縄戦始まる!

沖縄戦が始まると、旧日本軍は宇小那覇に沖縄東飛行場を設営し、また、西原村が首里の前哨戦をなす位置にあったため、多数の部隊が村内に陣地を構えた。そのため、侵攻してきた米軍との間に激しい戦闘が交わされ、その結果、壊滅的な打撃をこうむり、当時の人口の46.9%もの住民が犠牲となった。
(『資料にみる西原』ビジュアル版より抜粋)

沖縄戦で東江御殿と西江御殿の建物は戦火で消失したが、石垣と先王旧宅碑の台座などは、戦災を免れた。



1735年

東江御殿に賊が入り金丸使用の「宝枕」が盗まれた!



1737年

いえさとうぬしべーちん
伊江里之子親雲上が王命を受け西江御殿を重修し、瓦葺きとなし、周囲に竹を植えて垣を作った。
翌年、東江御殿の竹垣を石灰岩の切石で積んだ。



西江御殿

東江御殿

1738年

尚敬王みずから筆をとり「致和」の扁額をかけた。



東江御殿が王家一族の祭祀場となり首里王府の管理強化が図られた。



1760年

代々御殿を管理していた「東江御殿の御殿守の門」は、以前のように祭祀参加を再三陳情し祭祀への参加が認められた。



2011(平成23)年

西原町の念願であった内間御殿が

「国指定の史跡」に認定された。



〈参考文献〉
「内間御殿の成立と展開」発行: 西原町教育委員会
「沖縄の歴史前近代編」発行: (株) 沖縄教育出版
「沖縄の城ものがたり」発行: むぎ社
「琉球王国の歴史」発行: 月刊沖縄社